

## いわき沿岸域の復興とこれから ～魅力づくりに力の結集を～

あ べ けん いち  
阿 部 健 一\*

### 1. はじめに

34年間、務めた市役所を2016年3月退職し、早や2年6ヵ月が過ぎた。

東日本大震災からの復興半ばで退職となったが、今年に入って津波で甚大な被害を受けた沿岸域で進められてきた震災復興土地区画整理事業が竣工し、去る9月8日に、沿岸域全6地区の合同竣工式が執り行われた。

被災された地域を取りまとめてこられた自治会の皆様や権利者の皆様、地域の子どもたちが一堂に会し、事業に関わっていただいた国、県ならびに施行者の皆様、さらには各自治体から応援に来ていただいた職員の皆様に交え、一緒に完成の喜びを分かち合った。

事業の完成にご尽力いただきました職員の皆様や関係各位に、心より感謝申し上げる次第である。



写真-1 震災復興土地区画整理事業合同竣工式竣工式

### 2. 復旧・復興からのスタート

いわき市は、2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震により、死亡者467名（直接死・関連死・死亡認定を受けた行方不明者含む）、建物被害91,180棟（全壊・大規模半壊・半壊・一部損壊含む）、道路、河川、公共施設など、広範にわたり

甚大な被害を受けた。特に、沿岸域においては大津波により、多くの人々の尊い命と地域の文化・生業、人々のコミュニティーまで崩壊させてしまった。

発災から7年6ヵ月が経過し、今、堤防の嵩上げ工事や水門の設置、防災緑地や避難道路、防災拠点施設の整備、防災集団移転促進事業や震災復興土地区画整理事業、防災公園など、ハード事業により各施設の整備が終えられようとしている。

整備が終わった被災地では、復興公営住宅や新しい家屋が徐々に建てられ、少しずつ街並みが形成されてきている。

ようやく、被災地域が再生のスタートラインに立つことができた。

少子・高齢社会を迎え、これまで経験したことのない社会環境を迎えようとしているが、この竣工式を新しいまちの再生のスタートラインとして、一步一步、前に進んで行くことを期待したい。

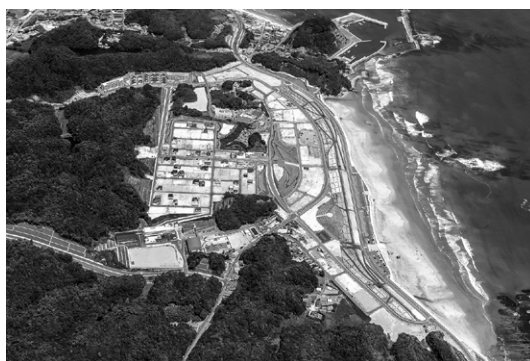


写真-2 海岸堤防や防災緑地、宅地の竣工状況（薄磯地区）

### 3. 地域の宝を活かすために

本市の沿岸地域は、約60kmに及ぶ海岸線を有し、風光明媚な自然環境を形成する黒松林や白砂の浜海岸、塩屋崎灯台や三崎公園など、年間を通して訪れる人々の心を和ませてくれる本市観光のシンボルと

\*元いわき市 都市建設部長（都市計画課長、市街地整備課長等を歴任）

なっている。

沿岸域の荒廃は、本市イメージを損なうことにつながり、海に関わるなりわいや、文化、コミュニティを取り戻したいという熱い思いと願いが、地域の皆様はもとより、復興に携わった方々の心のベクトルは共通していた。

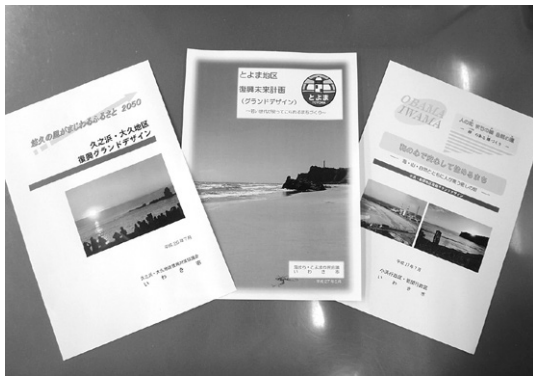


写真-3 被災各地域の未来計画を示すランドデザイン

## 1) 未来計画（ランドデザイン）について

被災沿岸域では、震災からの復興へ向かう過程において、各自治会の理解を得ながら、幾度となく意見を交わし、新たな未来計画（ランドデザイン）が作成された。

地域における津波災害からの安全性の強化、避難対策の強化、生活の再建、子どもたちの笑顔を取り戻す、地域の生活を支える産業や伝統・文化をつなぎ、日常を生き活きた以前の賑わいに取り戻す、そんな思いが、未来計画には込められている。

## 2) 協働作業を通して難しさ・楽しさの共有

未曾有の大災害から、多くの時間と費用、労力をかけ、被災地が新たに生まれ変わった。

各地域の掲げた未来計画を今後のまちづくりの指針としてまちの再生に活かすために、自治体職員と地域まちづくりに参加する方々との関わりを深め、実効性を高める取組みについて知恵を出し、行動していく環境整備が必要である。

### (1) 震災で生まれた新たなコミュニティ

これまで本市では、地区まちづくり計画（マスタープラン）の作成に多くの方々が参画できる「まちづくり市民会議等」を組織し、パートナーシップ協定を締結し、官民共同での計画づくりを進めてきた。自治組織とは違って、様々な方々が参加

できるような仕組みをまちづくりに取り入れてきた。

今回の震災からの復興まちづくり計画作成においても、この方式を踏襲し、沿岸域各地に自治会の理解を得ながら、次世代を担う方々が中心となってランドデザインは創られた。

これらの動きが、震災前にはなかった新たな地域コミュニティを作り出している。

地域の未来を考える、そんなコミュニティが芽生えたことは、地域自治にとっても大変うれしいことである。

高齢社会や核家族化など、社会環境が大きく様変わりして、地域のことには無関心というような、悲しい現実もある。しかし、呼びかけ方によっては、心ある人たちは必ずいるものである。

まちづくりは人づくり、地域のリーダーや人材を育成し、地域でいい仲間づくりができたことは、震災が生んだ、貴重な財産なのではないか。

### (2) 継続するためのパートナー関係

地域の将来に思いを寄せ、行動するための組織をいかに育て、自立させていくかは、行政にとっても、地域にとっても大きな課題である。

協働作業の難しさは、関わる人たちのモチベーションを下げないことにあり、関わった成果を参加者が認識できるような振り返りも大切である。

様々な情報が集まり、企画力・行動力に富んだ自治体職員が地域に率先して関わることは、地域の活力を育むことにつながる。

### (3) 成長・自立するまちづくり団体へ

行政とまちづくり団体の関わりは、事業の熟度に応じ、各段階で活動内容が変化してくる。

市内には「小名浜まちづくり市民会議」のような港町小名浜の街づくりの進捗に合わせ、自分たちの役割を見極め、日々変化し、市民を巻き込んで大きく成長している事例などもある。

今後、沿岸被災地域の復興ランドデザインが多様な人々の参画を得ながら、汗をかき、知恵を出し、様々な形で実現されることを期待している。



写真-4 復興の拠点として再生した小名浜港背後地

#### 4. 技術の粋を集めてつくられた施設を活かしたまちづくりへの取組み

東日本大震災からの復旧・復興によって、海岸線を結ぶ嵩上げされた防潮堤や大規模な防災緑地公園、防災拠点施設など、多くのハード整備がなされた。それぞれの持つ機能を十分発揮させるとともに、魅力ある施設として、地域活性化へつなげる取組みが期待される。

市内には、サイクリング・フィッシング・ゴルフなどのスポーツ・レクリエーション環境、海の幸、山の幸など豊富な食文化、温泉リゾート・リフレッシュなどの健康志向、様々な世代を対象とした滞在型の地域振興素材が数多く内在している。

約60kmに及ぶ海岸線をつなぐ堤防や防災緑地公園、要所要所に港が配置され、復興拠点として整備された小名浜港背後地など、早い段階からサイクリングロードとしての活用も検討されてきた。

**サイクリングロード整備\***一つをとっても、価値観の多様化、時代の変化、対象とする年齢層、マニアを取り込む多様な仕掛けづくり、地域振興と結びついた滞在できる観光戦力、地域のネットワークを生かしたサービスの連携プレーなど、多くの人の関わりや、観光に携わる企業の参画を引き出しながら、採算性も含め、多角的に魅力づくりを進めることが、ハードを活かすまちづくりには大切である。

魅力づくりのマネジメントにまちづくり団体が力

を発揮できるよう、リーダーシップと行動力ある人材の育成、さらには組織間の連携を強め、組織力、実行力を高めていかなければならない。



写真-5 愛称募集を開始した自転車道路網「海岸線ルート」

#### 5. おわりに

地域魅力をどう育てていくか、居心地のいい、地域再生をどう進めていくか、被災地に限らず、各自自治体に取り組んでいる命題である。

ハードを活かしたまちづくりのために、点での取組みから面での取組みへ連携を図らなければ、施設を活かすことは難しいと思う。法的な規制や制度上の制約を前面に出してしまうが、携わる人の思い・願いが強いほど、いい知恵が出て、困難は乗り切れるものである。

協働作業を通して、お互いが成長するそんな関係ができれば、ハードをつくる技術から、ハードを活かす技術が醸成され、結果を地域の魅力アップにつなげられるものと信じてやまない。

技術職員の皆様が持つ発想力、行動力、忍耐力、そして調整力をぜひ、地域の魅力づくりに活かしていただきたいと心より念願しメッセージとしたい。

#### 【用語解説】

※サイクリングロード整備

……いわき市が自転車道路網「海岸線ルート」として、自転車を活用した健康増進やレクリエーション活動の場を提供することを目的に、本市特有の優れた景観を有する海岸線に沿って、既存の国道、県道、市道や東日本大震災からの復旧・復興事業により建設された防潮堤の管理用通路、防災緑地の園路などを活用し、総延長約53kmの、安全で快適な自転車利用環境の創出を図る取組みで、今年度から本格的整備をスタートさせた。